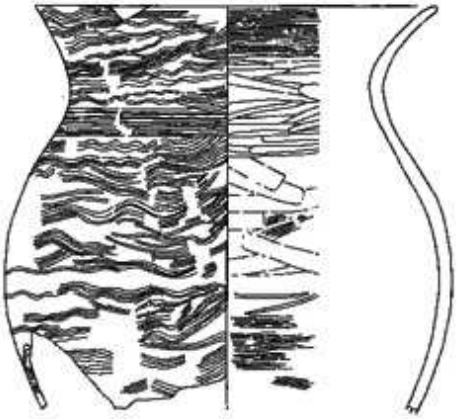
南条遺跡群

塚　田　遺　跡

――工業団地取付道路建設に伴う緊急発掘調査報告書――



1993

坂　城　町

坂城町教育委員会

序

坂城町教育委員会教育長　島田雅男

坂城町の工業の振興を図るため、南条の塚田・並木下地籍において塚田工業団地の造成事業が計画され、このたび、同事業に伴う進入路建設のため、発掘調査を行いました。

この塚田遺跡の調査は、道路幅員の関係から、狭く深いトレンチによる調査で調査団には困難を強いたわけですが、成果として弥生時代後期の集落が存在していたことが推測できたことや、古墳時代以降には水田という生産域になっていたことも明らかにすることができました。このことは、現在も行われている水田耕作の歴史の一部を明らかにすることができたといえます。

上信越自動車道の建設も進み、高速交通時代が目前に迫ってまいりましたが、それに伴う道路、工場などの建設は日増しに増加することが予想されます。このような急激な開発の波の中で、失われていく文化財を護り、後世に伝えていくことが私たちに課せられた使命であります。従って、このような激しい社会の中でも、最低限度の保護措置として記録保存し、現代社会に役立てていくことが重要であると考えます。

最後になりましたが、発掘調査に際しては、調査団長をお願いした森嶋稔先生をはじめとし調査に献身的にご協力いただいた協力者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

例言

1．本書は、長野県埴科郡坂城町大字南条字東塚田6064（代表地番）に所在する南条遺跡群塚田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、ＪＲ信越本線踏み切り改良に伴う取付道路の建設による埋蔵文化財の緊急発掘調査として、塚田遺跡発掘調査団が行ない調査面積は130m²であった。

3．発掘調査は平成４年10月14日～10月24日まで、また整理作業及び報告書作成は平成５年２月１日～平成５年３月29日まで行なった。

4．調査費用は事業主体者である坂城町が負担した。

5．本書の編集及び執筆は、森嶋調査団長のもとⅠを助川が、Ⅱ～Ⅳを都山が行なった。

6．調査で得られた遺物及び図面・写真等の資料は、坂城町教育委員会の責任下に保管されている。

7．発掘作業から本書作成にあたって次の個人、機関、団体から協力と助言を賜った。記して感謝したい。

（敬称略）

赤松　茂、大竹憲昭、川上　元、小山広夫、佐藤信之、坂井美嗣、林　幸彦、福島邦男、翠川泰弘、矢口忠良、矢島宏雄、日精樹脂（株）、（社）更埴広域シルバー人材センター

目　次

序
例言
Ⅰ　調査に至る経緯・調査経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……2
Ⅲ　検出された遺構と遺物……4
Ⅳ　まとめ……10
あとがき

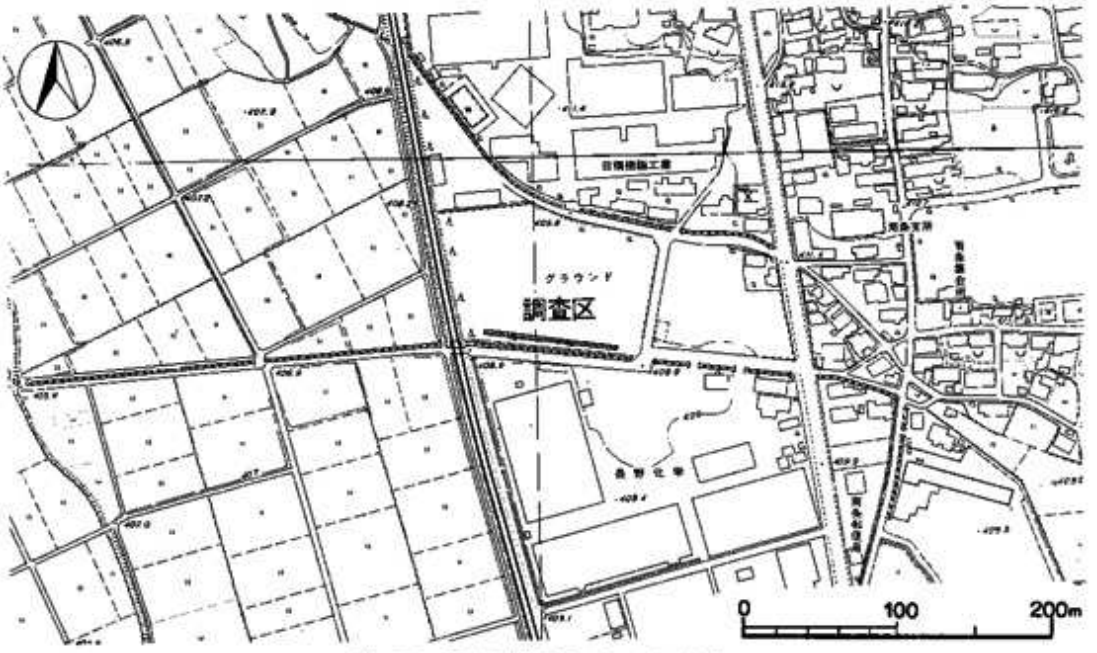
Ⅰ　調査に至る経緯・調査経過

南条遺跡群塚田遺跡は、坂城町大字南条に所在している。その位置は千曲川の度重なる洪水によって形成された沖積面上にあって、標高は410m前後である。平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、本遺跡は弥生～平安時代の複合遺跡である。又、近接する中町（新地）遺跡からは弥生時代後期の土器群や、昭和58年及び平成４年に調査された東裏遺跡からは縄文～中世までの資料が検出され、奈良・平安時代と思われる生産域と居住域が確認されている。

此の度、平成２年度より計画されていた坂城町土地開発公社が造成分譲する塚田工業団地造成事業に関連して、工業団地進入路建設のための道路新設工事が坂城町で計画された。それによって、平成４年10月２日、長野県教育委員会文化課、地元研究者森嶋稔氏、坂城町（商工課）、坂城町教育委員会の４者による現地保護協議の結果、10月14日から試掘調査を数日間行ない、遺構が確認された場合は再協議することとなった。先行する試掘調査によって、弥生時代の遺構確認面が深いことがわかり、又、調査範囲が狭かったこともあって、直接、本調査に切替えることにした。長野県教育委員会文化課との協議を行ない、調整した結果、急ぎ発掘調査団を編成し、調査を行なうこととなり実施した。

調査日誌

10月14日　重機による掘削を開始。地表下２～３mから土師器・弥生土器出土。調査区西側で湧水があり、調査用トレンチの壁面崩落。



第１図　調査区位置図（S：1/5,000）

10月15日　氾濫原の砂層下より畦畔を伴う水田層を確認。

10月17日　重機による掘削を終了。調査区東側より自然流の河川敷を検出。

10月19日　弥生時代後期の遺物包含層・遺構構築面を確認。１号溝址調査開始。壁面に沿って一部サブトレンチを入れる。

10月21日　雨水が流入し、復旧作業に手間取る。２号溝址・１号土坑址の調査。

10月22日　遺構平面図・壁面セクション図作成

10月23日　サブトレンチを拡張し弥生時代後期層を掘り下げるが、新たな遺構は検出されない。

10月24日　断面及び調査区全景撮影後、埋め戻しを完了。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

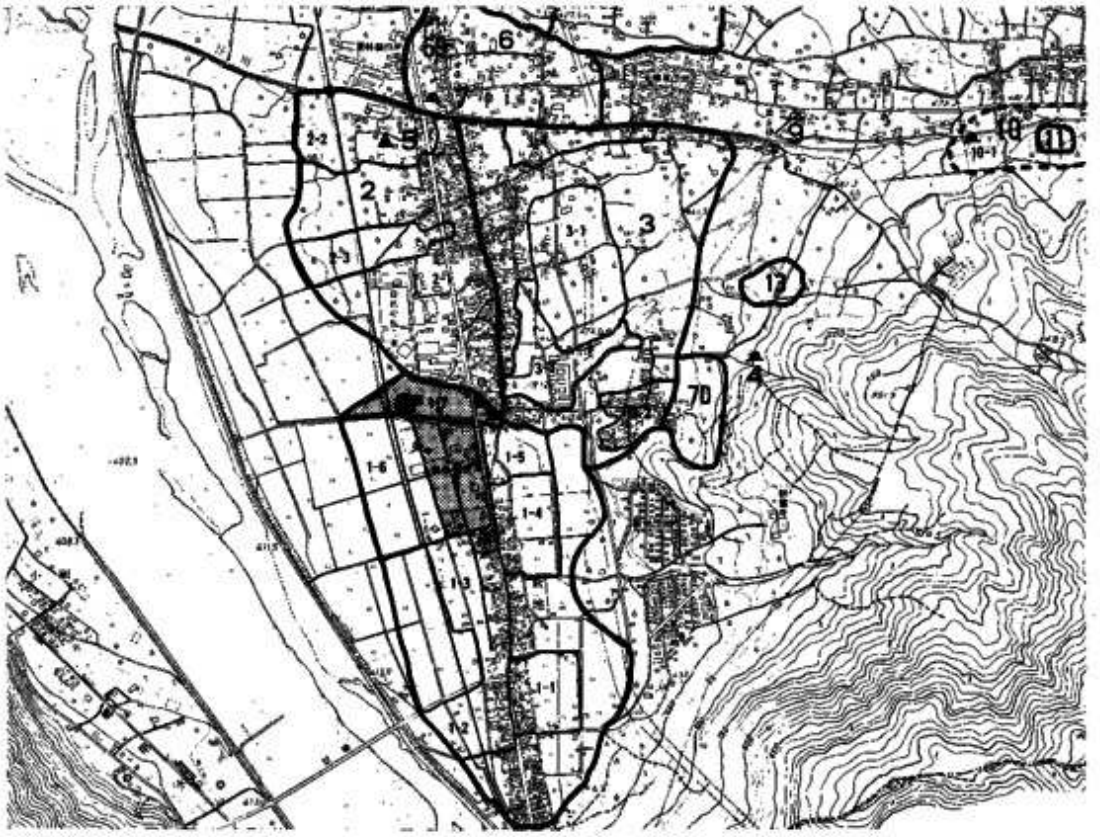
本遺跡は坂城町の中央南部、千曲川右岸の帯状に延びる氾濫原上に位置し、自然堤防と後背湿地との境目をその範囲としているものと思われる。

千曲川は、第三紀の断層谷である「坂城広谷」を緩いＳ字を描きながら北流し、肥沃な沖積盆地を形成している。坂城広谷の東西両岸には1200～1300ｍの峰々が連なっており、そこから千曲川に向かって幾筋もの中小河川が流れ込むことによって、山麓の洪積台地から千曲川沖積面にわたって広範な複合扇状地を形成してきた。こうした扇状地は、とりわけ千曲川右岸地域（坂城・中之条・南条地区）に顕著な発達をし、旧石器時代以降、縄文、弥生、古墳時代そして古代までの集落の展開と密接な関連をもつことが知られている。

さて、本遺跡の立地する南条遺跡群は、地質的には第四紀系の沖積面で自然堤防や中洲・東方の山脚部との間には後背湿地が形成され、豊富な資料を提供している。自然堤防上の中町（1－4）・百々目利（1－3）・田町（1－5）遺跡では、弥生時代後期から奈良・平安時代に至る土器が検出され、百々目利遺跡では古墳時代の祭祀用の土製鏡、また堤防北端の廻り目遺跡（1－6）では100点以上もの土錘が出土しており、当時の祭祀や生産の片鱗が伺え興味深い。東裏遺跡（1－1）は後背湿地の微高地上に位置し、６世紀前～後半の多くの祭祀遺物が出土した遺跡である。さらに今年度の調査によって、平安時代の水田層や住居址をはじめ、古墳時代後期の玉造り工房跡などが検出されて注目される。南条遺跡群の北には新旧の扇状地が張り出し、典型的な複合扇状地面をつくっている。金井遺跡（2－1）は、こうした扇状地の末端上に位置し、縄文中期勝坂期の出尻土偶も出土している。この金井遺跡は、北方の坂城地区に位置する込山遺跡群とともに縄文中期の拠点的遺跡と注目されている。保地遺跡（3－1）は扇状地面の台地端上に位置しており、町内唯一の旧石器遺跡であり、縄文晩期の遺跡としても名高く、北まわりの亀ヶ岡系の良好な資料が出土している。古墳時代では７世紀末の酒玉（3－4）・大木久保（3－3）遺跡などがある。山金井遺跡（3－2）は町内で確認されている数少ない奈良時代の遺跡の一つであるが、今年

度の調査で中之条地区の宮上遺跡から古墳時代後期・奈良時代の住居址群が新たに検出され、今後の展開が期待される。該期の生産遺跡では、土井ノ入須恵器窯址群が確認されている。又、東方の山腹には、谷川上・中流域に6、7世紀の谷川古墳群（10）が位置している。

以上、南条地区を中心とした遺跡の概観について触れたが、坂城・中之条地区では、9世紀代の寺院跡としての込山廃寺が注目される。前述した土井ノ入窯址群（1号窯址）では、込山廃寺のほかに、信濃国分寺、尼寺、更埴市正法廃寺の差し瓦が生産されていたことも明らかになっている。また、日名沢川右岸の尾根上からは、保元2年（1157）の紀年銘のある経筒が出土した北日名経塚がある。中世に至っては、葛尾山頂に豪族村上氏の葛尾城址もある。中之条地区では扇状地の扇央に近い山脚部に開畝製鉄遺跡が位置しており、時代的には中世末葉、村上氏末期に比定され、生産技法や供給の在り方など様々な課題を提示している。



第2図　周辺の遺跡

1 南条遺跡群　1－1 東裏遺跡　1－2 御殿裏遺跡　1－3 百々日利遺跡　1－4 中町遺跡　1－5 田町遺跡　1－6 廻り目遺跡　1－7 塚田遺跡　2 金井西遺跡群　2－1 金井遺跡　2－2 社宮神遺跡　2－3 並木下遺跡　3 金井東遺跡群　3－1 保地遺跡　3－2 山金井遺跡　3－3 人木久保遺跡　3－4 瀬玉遺跡　4 栗ヶ谷古墳　5 社宮神経塚　6 町横尾遺跡　7 北畑古墳　9 南条塚穴古墳　10 谷川古墳群　11 人横尾遺跡群　13 前原墳墓群　69 観音坂城跡　70 南解の川遺跡

Ⅲ　検出した遺構と遺物

今回の調査区は幅１～２ｍ、延長約80mときわめて狭小なトレンチの設定であったので、断面観察を中心に可能な限り調査を進めていった。湧水の噴出や調査壁面崩落といった事態もあり、十分なデータが得られなかった部分もある。そうした中で検出された遺構としては、平安時代の仁和（８８８）の洪水によるものと思われる氾濫砂層に被覆された水田址のほか、溝址２条、土坑址１基、また、氾濫終結後に生成した南北に流れる河川敷も確認された。出土遺物では、弥生時代後期箱清水式土器を主体に、古墳～平安時代の甕、坏等があるが、後者は数量的には僅かである。

遺跡近景

１号畦畔

３号畦畔

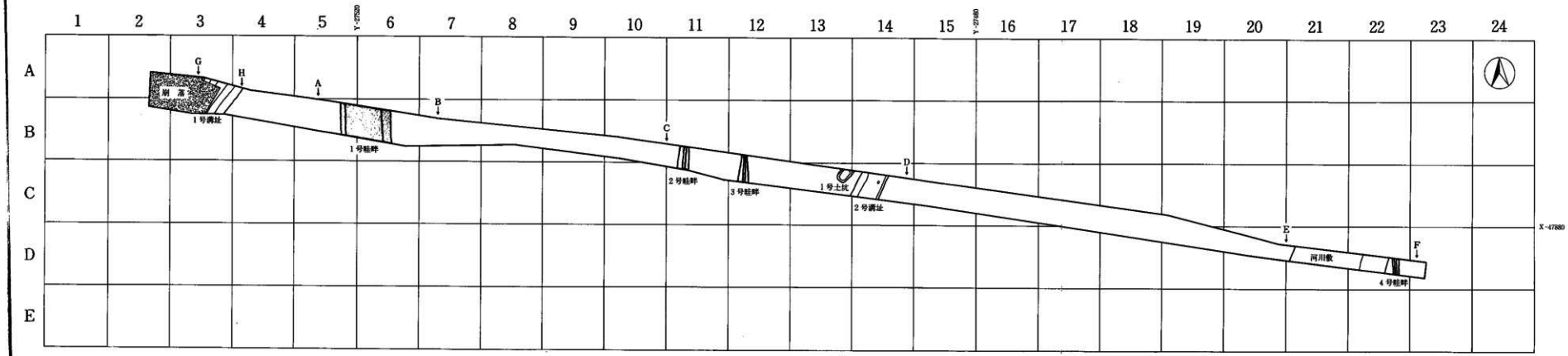
１号溝址（断面）

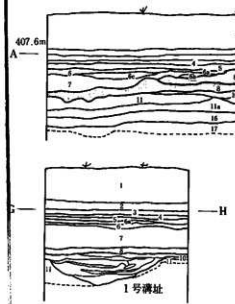
〔遺構〕

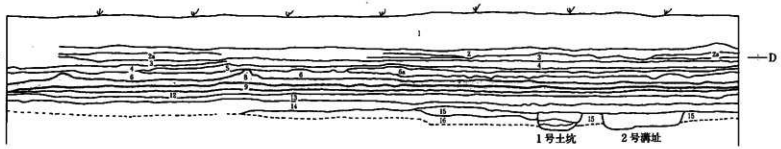
水田址

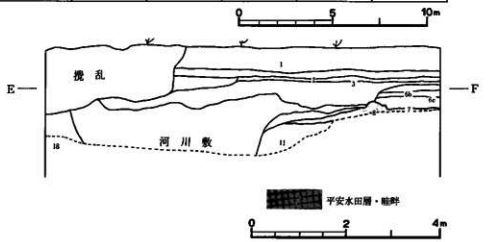
今回検出された水田址には氾濫砂層に被覆され、明瞭な畦畔を伴う平安時代の水田層であるが、それ以外に氾濫砂層の上層に黄褐色粘土層（５層）と、弥生時代後期面の上層に位置する黒褐色粘土層（13層）の存在についても水田址の可能性として若干触れておきたい。

５層は東側の旧河川に壊され、Ｂ-10．11グリッド付近で消滅しているが、平均層厚15cmを測り、その上面標高は407.4mである。また、西側のＡ-３・４グリッド付近からは層厚10cmとやや薄くなり、上面標高も約10cmほど下がる傾向にある。ここで注目される点









土層説明

1層　埋土。グランド造成工事に伴う盛土。

2層　暗灰色粘土層（N3/）。現代水田層。

2 a層　暗灰色粘土層（N3/）。現代水田層。部分的に溶脱化が認められる。

3層　黄褐色粘土層（2.5Y5/3）。水田溶脱層。

4層　明褐色粘土層（7.5YR5/8）。水田集積層。

5層　黄褐色粘土層（10YR4/3）。暗灰色粘土をブロック状（φ30～50mm）に含み大粒（φ5～15mm）の黒色スコリアを均等に含む。

6層　黒褐色砂層（2.5Y3/1）。暗灰色粘質土を団粒状に含み、黒色スコリアを含む。

6 a層　褐色砂層（10YR4/4）。暗灰色粘質土を団粒状に含み、黒色スコリアを含む。

6 b層　褐色砂層（10YR4/4）。暗灰色粘質土を団粒状に含み、茶褐色粘土を含む。黒色スコリアを含む。

6 c層　黒褐色砂層（2.5Y3/1）。6層より粘質土を除いた層。黒色スコリアを含む。

7層　黒褐色砂層（2.5Y3/2）。上部に5層の溶脱化が認められ黄変している。

8層　灰色粘土層（5Y4/1）。平安水田層。

8 a層　灰色粘土層（5Y4/1）。溶脱粘土を斑紋状に含み、砂質土を若干含む（上部に行くに従い多い）。大畦畔構築土。

9層　褐色粘土層（7.5YR4/6）。8層の溶脱層。

10層　黒褐色粘質土層（2.5Y3/2）。細砂粒を良く含み部分的に集積化が認められる。

11層　オリーブ褐色砂質土層（2.5Y4/3）。暗灰色粘質土を少量含む。粘性・締まりあり。

11 a層　オリーブ褐色砂質土層（2.5Y4/3）。11層に比べ砂質土を良く含む。

12層　灰オリーブ色粘土質（5Y5/2）。集積化が団粒状に認められる。8層の集積層。

13層　黒褐色粘質土～オリーブ黒色粘土層（10YR2/2～5Y3/1）。水田層？

14層　黄灰色粘土層（2.5Y4/1）。13層の溶脱層？

15層　黒褐色粘質土層（10YR2/3）。炭化物・炭化粒子を多量に含む。弥生時代後期の遺物包含層。

16層　オリーブ黒色粘質土層（7.5Y3/1）。炭化物・炭化粒子を多量に含む。弥生時代後期の遺物包含層。

17層　灰色シルト層（5Y4/1）。微粒砂を主体に、炭化粒子を少量含む。弥生時代後期の遺物包含層。

18層　黒色グライ土層。（N2/）。河川敷西側で確認。

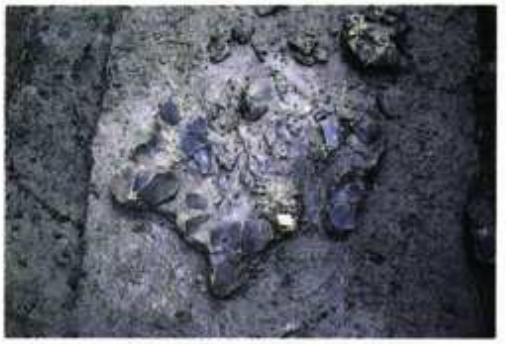
第3図　遺構配置・断面図

は、5層によって平安水田層の1・3号畦畔の頂部が削平されたかのような印象を受ける点である。ただ、削平されたかのような部分が畦畔頂部にのみ限られているため、これが氾濫終結後の新たな水田開発に起因するものか、あるいは単に土圧によって潰れたり、氾濫砂層の移動に伴って流失したものではないかといった疑問は残る。13層も東側で旧河川に壊され、B-5～8付近で消滅しており調査区全域で検出されたものではないが、その下層に普遍的に溶脱粘土層を持つことから、一応水田層の可能性を考えたい。平均層厚20cm、上面標高は406.8mでほぼ安定している。

8・9層は30～50cmもの砂層に覆われた平安時代前半の水田層である。遺物は出土しなかった。この砂層については仁和4年（888）の大洪水に由来するものかは一概に断定できないが、千曲川中流域の埋没水田址の在り方から本水田址も平安期の所産であると見てよい。

畦畔は、南北方向に延びるものが4ヵ所で検出された。1号畦畔はかなり大形のもので幅320cm、最高部で25cmを測るが、先に述べたように頂部が後世の影響を受けている。形状は略台形で、東側がこぶ状に盛り上がり中央が僅かに窪みながら、幅160cm程の平坦面を形成している。2～4号畦畔は、幅50～60cm、高さ15cmの丸みを帯びたカマボコ状を呈している。尚、3号畦畔は東側に一段下がって幅10cmのテラス状の平坦面を持つ。これらの走行方位は、1号畦畔が

2号溝址



同・遺物出土状況（上層）

1号土坑址

15・16層遺物出土状況

N-3°-Wと僅かに西に振れ、2～4号畦畔ではN-0～4°-Eを示し僅かに東に振れる。検出範囲が狭く、断面観察といった制約もあり正確さに欠けると思うが、何れにしてもほぼ磁北方位をとる。各畦畔間は西から21.4、42.5mの距離を測る。水田面の平均標高は1号畦畔を挟んで東側が406.1m、西側が406.8mで70cmもの段差が認められた。従って、1号畦畔はその規模・形状も含めて、水田区画以外でも大きな機能を有していたものと考えられる。

1号溝址

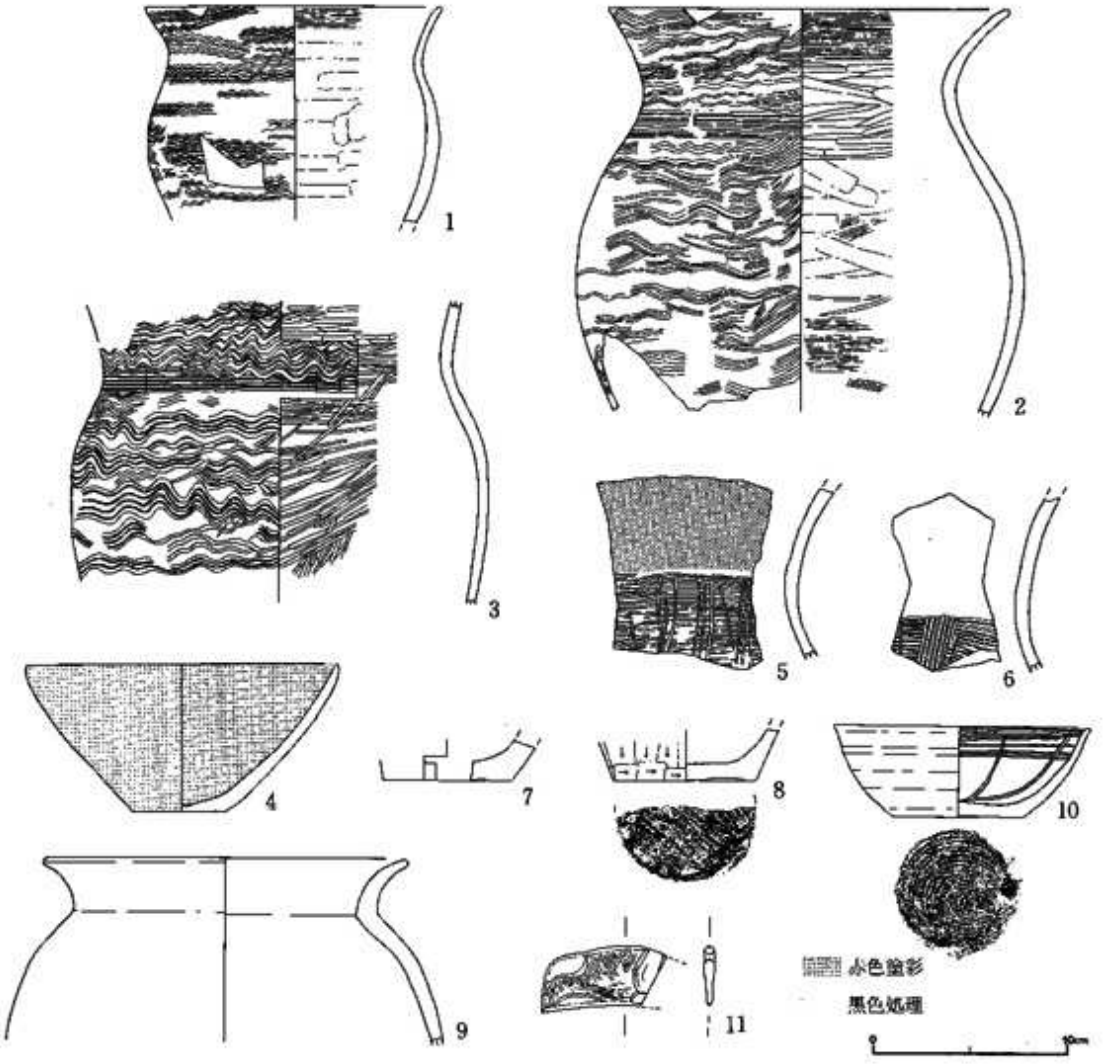
調査区西端、A-3・4、B-3グリッドに位置する。調査壁面崩落のために、一部図示できなかった。規模は幅240cm、深さ60cmを測り、断面形は概ね緩い丸底状を呈する。また、深さ40cm付近で両壁に小さな肩が設けられており、そこからは緩やかに立ち上がっている。走行方位はN-38°-Eを示し、ほぼ北東一南西方面に延びていると思われる。ピット等付帯施設は検出されなかった。本遺構は、平安水田層直下の13層及び11層に掘り込んで構築されており、その覆土は最下層の暗褐色砂質土を除けば上～下層に至るまで13層に相当する黒褐色粘土を主体にしたもので、中層には灰褐色粘土と灰褐色砂質土のレンズ状の堆積が観られる。遺物は土師器細片数点があるが、図示し得たものは、底面付近から出土した底部片1点（8）のみである。平安水田層より古く、弥生時代後期より新しい。

2号溝址

調査区のほぼ中央、C-14グリッドに位置する。上層から箱清水式土器が纏まって出土している。規模は開口部で幅170cm、底面で130cm、長さは160cmを検出したにすぎない。深さは25～35cmを測る。底面は概ね平坦な造りであるが、西側へ窪み気味に傾斜している。東側の壁よりに径12cm、深さ7cmの小ピットが穿たれていた。壁は直に近い角度で立ち上がっている。走行方位はN-25°-Eを示す。覆土は2層に分かれ、上層は15層に近似する黒褐色粘質土で、炭化材・炭化粒子を多量に含む。下層は砂質土の混入のある暗オリーブ粘質土。本遺構はその形状から溝というより、或いは明確でないが弥生後期の竪穴住居址かもしれない。

1号土坑址

C-13グリッド、2号溝址の西側に位置する。規模は開口部で(100)×90cm、底部は(85)×65cm、深さ40cmを測る。北側の一部が未検出だが、隅丸長方形を呈するだろう。構築面は2号溝址と同様15層上面である。覆土は3層に分かれ、上・中層に炭化材を少量含む黒褐色粘質土。下層は粘性はあるが締まりに欠ける黒色炭化土で、炭化材・焼土を多量に含む。底面直上より無文の胴部片が出土している。やや不明確であるが、箱清水期の何等かの遺構であろう。



第4図　遺物実測図（S：1/4）

〔遺物〕

1．　2号溝址の土器（第4図1～5）

2号溝址は弥生箱清水期の住居址の一部である可能性もあるので、ここに一括資料として提示することとしたい。1～3は箱清水式期の典型的な煮沸形態の土器、櫛描文の甕である。頸部に簾状文を持ち口縁部、胴部にやや乱れた波状文が行われている。やや右上がりの中部高地型の櫛描文の甕である。4はほぼ完形に近い丹彩の行われている什器形態の土器、碗である。入念な研磨がほどこされている。5は丹彩のある貯蔵形態の土器で壺である。頸部にT字文を持っているがやや定型的でない。頸部文様帯を除いて丹彩が行われていると見られるなで肩の土器であるが、最盛期を若干下るものかもしれない。小範囲であるため供献形態の土器である高坏などは得られ

ていない。

2号溝址の石製品（第4図11）

磨製石包丁（11）が1点出土している。刃部が直線的な半月型である。粘板岩製。

2．1号土坑址の土器（第4図6）

1号土坑からも弥生後期箱清水期の壺片（6）が検出されている。頸部文様帯にT字文が行われている。かなり整った施文の仕方であるが丹彩は行われていない。5と同様にしてなで肩でラッパ状に開口する大形の壺らしいが、同様にして若干時間的位置は終末期に下がるのかもしれない。いずれにせよ検出面が現地表面下2m余と言うのも注目される。

3．包含層の土器（第4図7～10）

7は底部に焼成前の一孔がある甑形の土器であるが所属する時期は特定しがたい。8はへらけずり痕のある底部の破片であるが同様時期は不明である。10は内黒処理の行われた坏形の土器であり、内面に十字の暗文と口縁部に平行な暗文があり、底部は回転糸切りである。平安初頭に所属時期を求めてよいであろうか。9は土師器の甕である。口縁部は強く外反し胴部は球形胴から長胴化が始まっているように思われ、6世紀代に求めていいものと思われる。

遺物は概して少量であったが、この遺跡が平安時代前半期から弥生後期にまで及ぶ生産遺跡から集落遺跡であることが判明したと言える。

Ⅳ　まとめ

坂城町南条遺跡群塚田遺跡の調査は1～2m幅の長さ80mという1本のトレンチのみであったが、緊急を要したためと、町道拡幅という狭い条件の中やむを得ない処置であった。しかし調査は、一部を除いて当初の目的を充分に達したと思う。①は仁和4年（888）一過性土砂による埋没田を検出したこと、②は弥生後期の住居址ではないかとされる2号溝址などを検出したことである。

①の仁和4年（888）の洪水については「四郡水横溢」（よんぐんみずおういつ）の記事がある。更級、埴科、水内、高井であろうことは明らかである。この時の泥土が4郡内に認められ、一過性の黄色砂質土層となって、水田面といわず、住居址も覆っている。更埴の厚いところで1.5m、上山田など薄いところで数cmから0cmとなっていて地域の状況によって異なりがある。川田条里面など水田埋没後も畦の上に同様な畦、水路の上に水路をつくっていることがわかっている。水路、大畦などは踏襲されたものと思われ保守的であったことがわかる。その点塚田遺跡の水田址は仁和の砂で覆われた後は地割りとしては明確ではないが、5層に及ぶ溶脱層が認められるので、氾濫による覆土と水田化が5回繰り返されていることがわかる。これは重要な検出である。水田

面の再生利用が活発に行われていたことを把握できる貴重な事実の検出である。又、弥生後期と思われる遺構（住居址か）の埋没後に少なくとも一時水田化したこともわかる。箱清水期と仁和4年（888）との間である。以後住居地域は生産地域へと土地利用の仕方が変化している。

②の弥生箱清水期の遺構と共にこの地域の利用の変遷を時間的に復元すると、

①弥生後期＝居住域　→廃絶埋没　→仁和四年以前水田　→埋没　→仁和四年時水田　→埋没　→水田　→埋没（5回繰り返す）　→現代水田　→グランド造成による埋没、となることは重要な所見と言える。標高406.4m時は弥生後期の居住域であって、その後数回の埋没と水田化が繰り返して407.6mまでおよそ1.2mが土砂で覆われていることになる。

調査団組織

（事務局）坂城町教育委員会

教　育　長　　島田雅男

社会教育課長　　塩野入猛

文化財係長　　山崎政弘

文 化 財 係　　助川朋広、小平光一

（調査団）

団　長　森嶋稔（千曲川古代文化研究所主幹）

担当者　助川朋広（教育委員会学芸員）

調査員　郡山雅友（臨時職員）

協力者　中村久子、宮尾美代子、
春原かずい、荻野れい子
（以上、臨時職員）
朝倉三郎、池田てる子、石井和美、
伊藤篤、上野かずえ、小林さよ子、
達家みきえ、塚田良子、中島千津子
中島晴一、中村さつき、中村容民、
西沢茂五郎、日向正義、柳沢文子、
山崎貞子
（以上、シルバー人材センター）

あとがき

工業団地用道路拡幅のため、日精樹脂工業グランドの南側の一部を調査することになった。幅員は狭く、長さは80mという線の寝床のような面積で当初の目的が達せられるか危ぶんだが、課題性に富む調査ができてほっとしているところである。

塚田遺跡が弥生後期には居住域であったこともおぼろげながら推測できるし、その後古墳時代、古代を通して水田の生産域となったことも明らかにすることができた。それも単に一回限りの水田化ではなく、洪水でおそらく埋没しても灌水しても、めげずに耕作したらしいことが、土地に残された歴史として伝わってくるのである。仁和4年（888）の大水害もどうやら克服して、続けて水田は使われているのである。その営みは頭の下がる思いでこの報告書をまとめることができた一つである。

調査は狭い範囲で難行したが、得るところはこの地域の歴史にとって最大限のものであった。この成果は関係機関、関係各位、協力者のみなさんの努力の賜である。記して感謝の意を表したい。

平成5年3月20日

調査団長　森嶋　　稔

発行日　平成5年3月30日

編集者　南条遺跡群塚田遺跡発掘調査団

発行者　坂城町教育委員会

〒389-06 長野市埴科郡坂城町大字中之条2,468番地
TEL 0268 (82) 2069

印刷者　森 出版

〒381 長野市吉田4－3－4
TEL 0262 (43) 1201